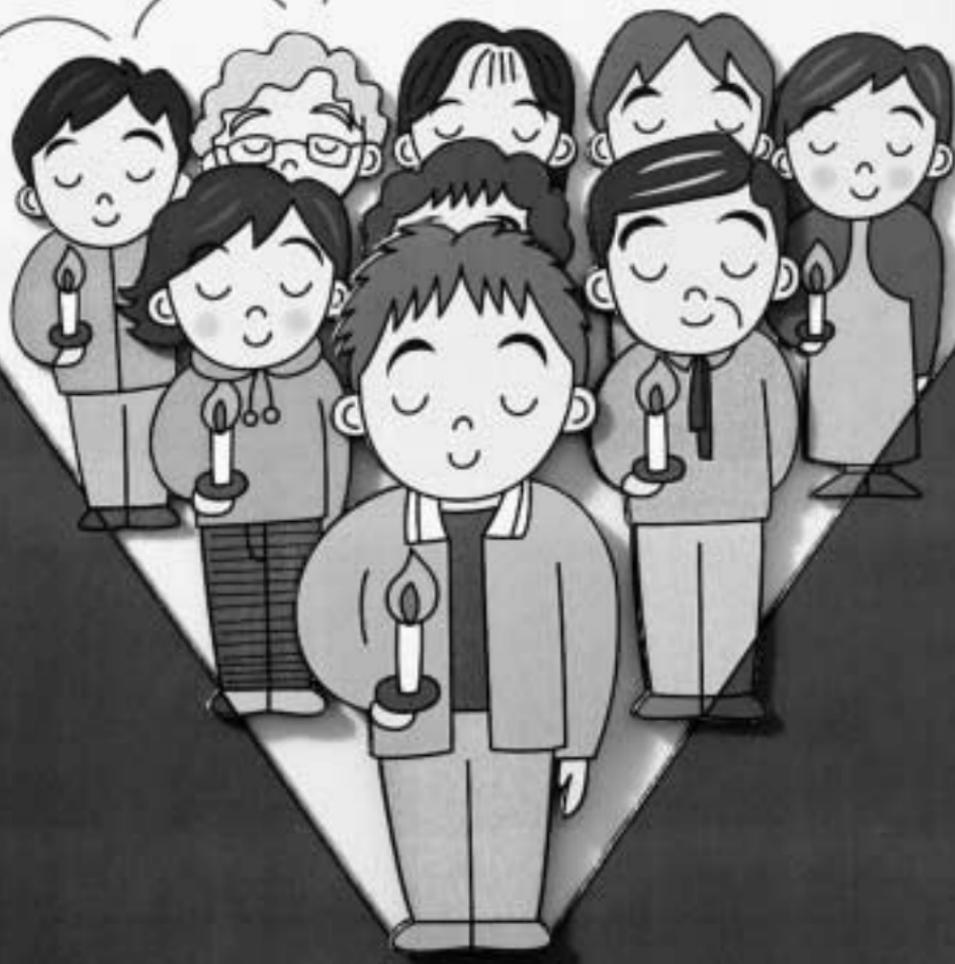


一隅を照らす





雪の日の出来事



社会を明るく温かい、住みよいものにしていく鍵は、そこで生きる私たち一人ひとりの心がけにあります。それぞれが身近なところで温かい心づかいを発揮し、「一隅」を照らす実践を続けていけば、やがて社会全体が温かい心で満ちていくのではないでしょうか。

今月は、自分自身や周囲の心とともに豊かにして、同じ社会に生きる人と人との絆を結ぶ生き方について考えます。

ある夜、東京近郊に住む会社員の池田さん（32歳）が体験した出来事です。

その日は夕方になって、雪が降り始めました。仕事を終えた池田さんが同僚の藤井さんと連れ立って会社の外に出ると、歩道にも車道にもすでに雪が数センチ積もっていました。

会社から最寄り駅までは、歩いて十五

分ほどかかります。二人は靴が滑らないように、慎重に歩き始めました。

上り坂にさしかかったとき、道路の真ん中に一台の車が停まっていたところ、雪でうやら坂道を上ろうとしたところ、雪で滑って立ち往生しているようです。池田さんたちが近づいていく間にも、その車は坂道を少し上ってはズルズルと滑り落

ちるといふことを繰り返してきます。

見かねた池田さんが「私たちが後ろか



ら押しますので……」と声をかけると、運転席の男性は黙つてうなずきました。

二人で懸命に車を押すと、車はゆっくりと坂道を上りはじめました。そのまま押しながら三十メートルほどの坂を上りきり、平らな道に出たそのときです。押していた車が急に速度を上げたため、藤井さんが勢い余つて転んでしまいました。「危ないじゃないか！」

池田さんは声を上げましたが、車はそのまま何事もなかったかのように走り去っていきました。

「急いでいたのかもしれないけど、せめて手を挙げるなり、お礼の合図ぐらいはしてもいいよなあ」

二人は呆気にとられながら、遠ざかつていく車を見送りました。



大切なのは自分だけ？

「なんだか最近、〃自分さえよければいい〃っていう、自分勝手な人が増えた気がするな」

気を取り直して駅への道を歩き出したものの、思わずつぶやいた池田さん。大通りに出ると、救急車がサイレンを鳴らして雪道を走っていきました。その様子を目で追いながら、藤井さんはこう返しました。

「そうだなあ。うちの近くの消防署には、近所の人から『出動のとき、救急車や消防車のサイレンを鳴らさないでくれ』っていう電話が入ったそうだよ。そりやあ隣近所に住んでいたら騒がしいことも多

いかもしれないけれど、緊急のときに鳴らさなかつたら何のためのサイレンだか分からないよな」





「その「ゴミ」も拾いまっしょい」

「まったくだね。そういえば、うちのほうでも聞いたことがあるな。『街灯の光が寝室に入るから、自分の家の前の街灯は撤去してくれ』とか、『バス停を自分の家の近くに移動してくれ』とか……。自分勝手な要望にいちいち対応していたら、町

も大変だよ。『モンスター・ペアレント』なんて言って問題になるのも、そういうことなんだろうね。少しは周りの人のことも考えられないのかな」
人助けをしたはずが、後味の悪さだけが残った雪の夜の出来事でした。

一週間後、名古屋に出張した池田さんは、仕事を終えて東京行きの新幹線に乗り込みました。車内は空いており、池田さんが掛けた座席の隣は空席です。通路を挟んだ三人がけの座席には、六十代ほどの夫婦とその息子らしき三人連れが座っていました。

池田さんの後ろの座席には、幼稚園児ぐらいの女の子が母親と一緒に座っていました。本を読んでいた池田さんは、後ろから聞こえてくるほのぼのとした親子の会話に心を和ませているうちに、やがて眠ってしまいました。

しばらくして、品川駅への到着を知ら



せる車内放送で目が覚めました。通路の向こう側に座っていた三人連れは、身支度をして降りていくところでした。

東京駅で降りる池田さんも、荷物棚に載せた鞆を取ろうとして立ち上がると、人がいなくなった向かいの座席の様子が

目に入りました。座席のポケットには、ペットボトルや紙コップ、ビールの空き缶が入ったまま。床には弁当の空き箱が乱雑に放置されていました。

「お金を払って乗った電車でも、後片付けをして降りるのがマナーじゃないか。こんな勝手なことをされたら、周りで見ているだけでも不愉快だ」

池田さんは憤りを覚えながら座席を離れ、出口へと向かいました。すると、背後から「そのゴミも拾って、ゴミ箱に入れましょうね」という、朗らかな女性の声が聞こえてきます。池田さんが振り返ると、後ろの座席に座っていた女の子と母親が、向かいの座席に散乱するゴミを手に取り、自分たちの弁当の空き箱を入れたレジ袋に片付けているところでした。

他者批判を超えて

自分のゴミを捨てるついでに、近くに落ちてゐるゴミも拾うこと。それはささやかな行為です。ところが、この親子の姿を目にした池田さんは「自分勝手な人も多い世の中に、こんな人がいるのか」と、大きく心を動かされました。そして、放置されたゴミに眉をひそめるだけで何の行動も起こさなかった自分が恥ずかしく思えてきました。車内を汚した人と、それを非難することでみずからの心を汚した自分。その差はあまりないようにも感じられたのです。

やがて、あの雪の日の出来事が心よみがえってきました。

「自分の助けに感謝の気持ちを表してくれなかった相手を心の中で責めたけれど、相手が無事に坂道を上れたことを喜べばよかったのかもしれない。人助けをしたつもりなのに怒ってしまったら、せつかくの善意も台無しじゃないか」

そんな考えもわき起こってくるのでした。

*

社会の中で、自分勝手のように思える他人の言動を見聞きしたとき、私たちはどのように思うでしょうか。「こんなことでは世も末……」と嘆かわしく思ったり、怒りに任せて相手を批判したり、言

うべき言葉を失ってただあきれたりすることもあるかもしれません。しかし、嘆いているだけでは世の中はよくなりませんし、感情のままに相手とぶつかっては、周囲にますます波紋が広がってしまうことでしょうか。

私たちがよりよい人生を築くためには、自分をとりにまく社会もまた、よりよいものになっていく必要があります。そのためには、まずみずから発信源となり、温かい心をもって周囲に相對していくことが大切です。たとえ一人ひとりの力及ぶ範囲には限りがあっても、また、その行為の一つ一つがどんなにささやかであつても、その積み重ねこそが自分や周囲の人々の心を豊かにしていくのではないのでしょうか。



一隅を照らす 生き方

東洋思想の研究と後進の育成に努めた
安岡正篤氏（二八九八〜一九八三）は、
次のような言葉を残しています。

「暗黒を嘆くより、一燈を付けましょう。
我々はまず我々の周囲の暗を照す一燈
になりましょう。
手のとどく限り、至る所に燈明を供え
ましょう。」

一人一燈なれば、萬人萬燈です。

日本はたちまち明るくなりましょう」

（『安岡正篤一日一言』致知出版社）

社会の現状を嘆くのではなく、自分

身が温かい心づかいを發揮して、自分の
身近な「一隅」を照らす存在になること。
これを一人ひとり、より多くの人々が実
践すれば、無数の小さな光は世の中を明
るく照らす大きな力となります。

さらには、そのような一人ひとりの真
摯な取り組みが周囲の人々の心を動かし
て、同じ思いで実践を始めようとする仲
間や協力者・支援者が現れてくることも
あるでしょう。そうした事例をご紹介します。

心を育み、心をつなぐ花育て

高知県に住む森田由記子さんは、「みんなで地域社会に恩返しを」との思いからボランティアグループ「野乃花俱樂部」を主宰し、花壇づくりを通じて町をきれいにする活動に取り組んでいます。

長年、森田さん夫妻が空き缶の分別収集や町の清掃奉仕を続けていると、やがて友人たちも加わるようになってきました。そのころ、清掃してもすぐにゴミが散乱した状態になる空き地に出会い、清掃のたびにイライラしたそうです。そんなとき『ニューモラル』の勉強会で、よいことをしながらいつの間にか人を責めている自分の心に気づかされ、また、きれいな

所にはきれいなものが集まる」と習い、花壇づくりを思い立ちました。町の有志とともに一つめの花壇をつくり上げたのは平成十五年。その後、多くの人の共感と協力を得て活躍の場を広げています。

花壇の完成後も、四季を通じて水やりや草取り、花の植え替えなどに心を配ります。空き地は心安らぐ憩いの空間に生



まれば変わり、地域の方から「散歩コースをこつちに変えたよ」という声まで聞かれるようになりました。さらには、会員以外でも進んで花壇のお世話をする人が現れたり、各方面から花の苗の提供を受けたり、地域の保育園や学校の子供たちと一緒に和氣藹々と花を植えたり、行政や企業からも援助の申し出があつたりと、花とともに心の絆が育まれています。

昔は「こんな所にゴミを捨てて……」

「誰かが何とかしてくれないかな」とも思つたと言う森田さん。みずから行動を起こし、折々に「恩返し」という原点に立ち戻ることので心が穏やかになり、いつしか周囲に善意の輪が広がっていったそうです。「多くの人に支えられ、私自身の心を育てていただいている」と言います。



お年寄りを支える地域の力

京都市に住む細見欣三さん・正枝さん
夫妻は、手づくりのお弁当を地域のお年寄りに実費で配達するグループ「配食ボランティア葵」を主宰しています。

細見さん夫妻が「お年寄りに食事を届ける」というボランティア活動に巡り会ったのは、平成八年のこと。当時、自宅の向かいの家では、欣三さんの高校時代の恩師が一人で暮らしており、夫妻は何かと気にかけていたと言います。ある

日、そのお宅にお弁当を届けに来たボランティアグループの女性と出会ったのが縁で、共感した夫妻はそのグループに参加するようになりました。

やがて、同じ地区を担当する仲間とともに八食分の配達先を引き継いで独立。新たな仲間も加わって「配食ボランティア葵」として活動を開始し、年を重ねるごとに利用者が増えていきました。食事に難儀するお年寄りに「葵」を紹介したのを機に、このグループの活動に参加するようになったヘルパーの女性もいると言います。

「一人、二人の暮らしでは品数を多くつ





くれないし、出来合いのものを買つてくると味が濃くて……」という高齢者世帯で、心待ちにされる家庭の味。栄養のバランスや味付けのほか、盛り付けや季節感などの「食事の楽しみ」にも配慮したお弁当づくりが行われています。また、利用者に直接お弁当を手渡して言葉を交わし、様子を確かめることも「配食ボランティア」の重要な役割です。訪問を重ねていくうちに、生活上の相談を受けることもあると言います。

社会の「高齢化」や「無縁化」にまつわるさまざまなニュースが聞かれる昨今にあつて、町の有志が活躍して互いに支え合い、心の絆を結んでいる姿には、「一隅を照らす」実践の力を見ることができるとしよう。

「心の学び」を よりよい社会を築く力に

本誌『ニューモラル』

は、心豊かな人生、楽しい家庭、明るい職場、住みよい社会をつくるための「日々の心づかいと行い」について、読者の皆様とともに考えていくことをめざし、昭和四十四年九月より発行を重ねてまいりました。次号（平成二十三年四月号）をもって、おかげさまで創刊五百号の節目を迎えます。

読者の皆様からは、次のような声もお寄せいただいています。

新聞やテレビを見るにつけても心が痛むことの多い昨今ですが、『ニューモラル』を読むと、人として大切なことに気づかれます。一人でも多くの方に読まれ、世の中がよくなっていくことを願っています。





毎月『ニューモラル』を愛読しています。心豊かな人生を送り、住みよい社会をつくっていく努力の大切さを伝えるため、わが子、そして孫にも愛読を勧め^{ます}ています。



私自身も高齢になりましたが、『ニューモラル』に感動し、毎月十数部を購^入して近所のお宅に届け、その都度、皆様がお元気であることを確かめています。

“よりよい社会を築いていきたい”という、同じ志をお持ちの皆様を支えられての五百号。本誌もまた、皆様の「一隅を照らす」実践の一助となることができま^すように精進を重ね、今後も『ニューモラル』のメッセージを発信してまいります。